様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 １５ 日現在

機関番号：３２６８９
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2019～2022
課題番号：１９Ｋ００５０８

研究課題名（和文）19-20世紀転換期のロシア女性作家研究―ジナイーダ・ギッピウスを中心に

研究課題名（英文）A Study of Russian Women Writers at the Turn of the 19th and 20th Centuries: Focusing on Zinaida Gippius

研究代表者
草野　慶子（KUSANO, Keiko）

早稲田大学・文学学術院・教授

研究者番号：１０２６７４３７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、ふたつの課題を掲げていた。第一に、20世紀前半のロシアの詩人・作家・批評家であるジナイーダ・ギッピウスを中心に、同時代ロシア内外の文学・芸術の動向、とくに女性文学という領域を精査すること、第二に、ギッピウス以後の、つまりは20世紀後半以降のフェミニズム批評やジェンダー／セクシュアリティ研究に、19-20世紀転換期のロシアの女性文学を接続させることである。
ふたつの課題について、ともに1900年代のギッピウスの詩作品や評論、エッセイ、書簡を起点に研究を行った。そのなかで新たに、現代思想においてきわめて重要な主題である動物／動物性という問題系が本研究の展望に加えられた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は、日本において初めての本格的なジナイーダ・ギッピウス研究である。さらに、ギッピウスを中心とした同時代のロシア女性文学の研究としても、わが国のロシア文学研究に大きく寄与するものである。加えて、比較文学の視点をもって、ギッピウスとその周辺のロシア女性文学を、20世紀後半以降の世界の女性文学やフェミニズム理論につなぎ、結果として世界文学のひとつの系譜を明らかにするものでもある。加えて、女性そして動物という、社会において周縁化されるカテゴリーを架橋する交差的研究への道を開くものでもある。

研究成果の概要（英文）：This study had two tasks. First, to examine closely the literary and artistic trends in Russia and abroad, especially in the area of women's literature, with a focus on Zinaida Gippius, a Russian poet, writer, and critic of the first half of the 20th century. Second, to connect Russian women's literature at the turn of the 19th and 20th centuries to feminist criticism and gender/sexuality studies after Gippius, i.e., since the second half of the 20th century.
For both of these issues, we have studied Gippius' poetic works, criticism, essays, and letters from the 1900s. In the course of this research, a new problematic system of animal/animal nature, an extremely important subject in contemporary thought, was added to the perspective of this study.

研究分野：ロシア文学・比較文学

キーワード：ロシア文学　比較文学　女性文学　フェミニズム　ジェンダー研究　セクシュアリティ研究　動物研究　世紀転換期

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

研究開始当初、研究遂行者には、すでに本研究課題に関連する多くの業績（論文等）があった。ジナイーダ・ギッピウスの作品や思想を論じたもの、19-20 世紀転換期ロシアにおけるジェンダー／セクシュアリティ研究に関するもの、とくに女性同性愛表象を論じたもの、さらに、同時代ロシアの身体観を舞踊や美術、文学、思想を横断しつつ考察したものなどである。

研究対象となった具体的人名をキーワードとして挙げれば、ウラジーミル・ソロヴィヨフ、リヂヤ・ジノヴィエワ=アンニバル、ヴャチェスラフ・イワーノフ、マクシミリアン・ヴォローシン、レフ・バクスト、イサドラ・ダンカンらとなる。こうした人物はすべて、本課題において焦点となるジナイーダ・ギッピウスの同時代人であり、ギッピウスと直接の影響関係にある、さらには私的な交流をもつ、あるいはギッピウスが思想的・芸術的観点から強い関心を寄せた人物である。つまり、本研究に着手するにあたっての、基礎的な研究の基盤は十分に整っていた、そうした背景のもとに本研究は開始されたのであり、当然ながら過去の研究成果と結びつつ、それらを深化・発展させることが期待されていた。

２．研究の目的

本研究の目的は、第一に、ジナイーダ・ギッピウスを中心に、同時代のロシア女性文学の見取り図を示すこと、第二に、そこでなされた考察を、現代世界のフェミニズム思想や批評、ジェンダー／セクシュアリティ研究へと接続することであった。

第一の目的は、日本のロシア文学研究において研究遂行者がすでに切り拓いてきた領域において展開され、さらなる成果を目指すものであった。とくに本研究においては、ギッピウス、および同時代の女性文学者のことば、あるいはふるまいが、男性中心の文壇においてどのように受容され、そこでいかなる政治的・文学的やりとりがなされ、闘争、抑圧と抵抗がどのように展開したか、その言説空間のダイナミズムを描出することを目標とした。

第二の目的は、こうした研究成果をあらためて世界文学のコンテクストに接続し、そうすることによって、19-20 世紀転換期におけるロシア女性文学の文化的・歴史的重要性、その先進性と独自性、現代的意義を明らかにしようとするものである。具体的には、20 世紀以降、英語圏および仏語圏において展開されてきたフェミニズム思想・批評の流れと向き合うとき、19-20 世紀転換期のロシア女性文学がそれとの関連でどういった立ち位置にあるのかという視点を獲得することが、決定的に重要であった。ロシア語文学の領域において試みられた表現、達成された女性のことばは、決して孤立した文化現象ではあり得ず、言語と文化圏を横断して共鳴し、また、続くのちの時代のことばを予告し、そこに確実な痕跡を残すものであると、研究遂行者は考える。世界女性文学の、いまだ語られていない、発見されてもいない系譜を召喚し、記述することが本研究の第二の目的である。

３．研究の方法

上記「研究の目的」にそい、まずはギッピウスの 1900 年代の詩作品、散文、評論、エッセーなどを広く考察し、それらが当時のロシアの文壇においてどのように受容され、どのような文学的応答がなされたかを綿密に調査した。その過程でギッピウスと他の女性詩人・作家との影響関係、共通点や差異、男性の文学者たちとの権力関係、ジェンダー的力学を詳らかにすることにもなった。

ギッピウス独自の創作原理や詩学、思想をめぐる考察はまた、その先進性の発見へと導かれた。すなわち、現代のフェミニズム批評やジェンダー／セクシュアリティ論の先駆とも言うべき知見やパラダイムを、ギッピウスのことばから読みとることにもなった。とりわけ、フランス出身でアメリカでも活躍した作家・思想家モニク・ウィティッグ（1935-2003）のフェミニズム理論とギッピウスの思想とを比較し、その親近性を指摘したのは世界で初めての成果である。これはまた、主著のひとつ『ジェンダー・トラブル　フェミニズムとアイデンティティの撹乱』（1990）においてウィティッグ理論を批判的に継承し、それを経て方向づけられたジュディス・バトラー（1956-）の思想、ひいてはバトラーに代表される現代フェミニズム思想へと、ギッピウスの創作と思想を接続させることにもなった。

また、ギッピウスが自己を描出する際に、あるいはギッピウスを描出する際に周囲が頻繁に用いた動物の表象を分析すること、この方法でもって、本研究は新たな段階に入った。＜動物＞は、ジャック・デリダやジョルジョ・アガンベンの名を挙げるまでもなく、現代思想の鍵概念のひとつである。＜動物＞そして＜女性＞という、人間＝男性中心主義的社会において周縁化され、疏外され続けてきたカテゴリー、より正確に言えば、人間＝男性中心主義社会を成立させる起源となったカテゴリーを交差させ、複数の周縁的カテゴリーの架橋を起点に現代の諸問題に対する

視座を獲得することが可能になった。これにより本研究は、現代における社会的意義をより明確にしたと言える。

なお、2018 年からの世界的な新型コロナウィルス感染症の流行、そして 2022 年のロシアによるウクライナ侵攻により、海外（とくにロシアにおける）調査が不可能な状況に陥ったことは、不可抗力とはいえまことに遺憾な事態であった。結果として本研究は、1 年の研究期間延長をもってしても海外調査を実施することができなかった。さらなる延長を行なう選択肢もあったが、状況の好転の見込みがきわめて不透明なことから、交付された額をかなり残して終了することとした。国民の税金を原資とする研究を、不透明な状況のなかで延長し続けることは不誠実であると判断した。しかしながらむろん、オンラインによる学術交流等によりこうした不測の事態に対処するなど、研究方法に工夫を加えて課題遂行を進めた。その結果、研究課題当初の目的は概ね達成できたと見なしている。また意図せざることではあったが、経費が抑えられるという副次的な効果もあった。

４．研究成果

上記「研究の方法」により、以下の論文を執筆した。論文題に続けて、その梗概を記す。

「書く／愛する私と私の像　ジナイーダ・ギッピウスの『痛み』(1907)について」（Waseda Rilas Journal, 第 8 号, 2022 年）

本論文は、ジナイーダ・ギッピウスの詩『痛み』が、発表当時の 1907 年に引き起こした文学的事件をまず追う。『痛み』は女性が性的快楽の主体となる詩として読まれ、それがタブーであった時代にセンセーショナルな反応を惹起した。『痛み』のパロディ詩が複数あらわれたが、それらはギッピウスという女性詩人への差別的嘲笑を含むものであった。作者ギッピウス自身は、『痛み』がエロティシズムを主題とするものであることを強く否定し、この詩がポルノグラフィックな告白と読まれることそのものに文壇の女性差別を見出し、精力的に反論した。

本論文ではこうした反論を含むギッピウスの評論をも読解する。その過程で考察の対象となるのは、＜女性＞カテゴリーの定義、ジェンダーのパフォーマティブな成り立ち、ポルノグラフィをめぐる女性の書き手の戦略、告白という制度、などである。また、＜痛み＞という概念と並び立つ皮膚の快楽、それがいかに規範的異性愛ヘゲモニーに抗しうる立ち位置を提供するかについても考察する。あわせて、ギッピウスにとって＜書く＞行為と＜愛する＞行為が不可分の関係にあったことをも指摘し、エクリチュール・フェミニンといった 20 世紀後半以降に定位される概念へとつなげていく。

「ジナイーダ・ギッピウスのフェミニズム　モニク・ウイティッグとの比較を中心に」（比較文学年誌, 第 58 号, 2022 年）

本論文は、ギッピウスの評論あるいは批評から、20 世紀後半以降のフェミニズム理論、そしてジェンダーあるいはセクシュアリティ研究に関わる問題系を抽出、整理し、それらがウィティッグの理論とのアナロジーを示していることを論証する。ウィティッグは、20 世紀前半から後半に至るフェミニズム思想の流れにおいて、クィア・スタディーズの牽引者であるジュディス・バトラーへの接続点、中継者として位置づけられ、よって、20 世紀初頭のロシアで遂行されたフェミニズム的文学実践であるギッピウス、その思想や理論との比較の対象としてふさわしい。言語圏文化圏を異にするフェミニズム的実践を比較し、論ずることは、世界女性文学の新たな歴史記述を行い、見取り図を描く試みでもある。

また、周知のとおりウィティッグは、理論家であるばかりでなく作家でもあり、本論文ではウィティッグの小説とギッピウスの詩作品との比較も行なっている。それは結果として、規範的異性愛における男女の主体の非対称的関係、生殖に差し向けられるがゆえに、明確な始まりと終わりをもつ営為として構造化される異性愛主義的性のあり方に対して、主客分離せず、互いに固定的権力関係に至らず、ゆえに流動する主体同士の終わりのない交歓が可能な、硬直化にさらされる構造を持たないセクシュアリティという、レズビアン的な性のオールタナティヴを示唆することにもなった。本論文ではそこから、現代日本の女性作家である松浦理英子の作品とエッセーにも言及し、世界女性文学史記述の一端を担うという意図を明確にしている。

「犬と読む書物」（早稲田現代文芸研究, 第 12 号, 2022 年）

早稲田文芸・ジャーナリズム学会における講演（後記）をもとにしたものである。女性作家や理論家を中心に、犬の文学、犬と関連づけられた文学理論を追う。ギッピウスや松浦理英子はもちろん、ヴァージニア・ウルフ、ダナ・ハラウェイ等々が射程に収められる。全体として、比較文学史的展望を含んだ研究的素描に近いものだが、この論考における動物／動物性への関心が、以下の論文「ジナイーダ・ギッピウスの創作における〈動物性〉の問題　初期詩作品を中心に」へと展開していくこととなった。

「ジナイーダ・ギッピウスの創作における〈動物性〉の問題　初期詩作品を中心に」（早稲田大学大学院文学研究科紀要, 第 68 号, 2023 年）

本論文ではまず、世紀転換期におけるギッピウスの思想にとって決定的に重要だった要素、す

なわち生殖忌避について説明する。生殖とはすなわち、異性間の性行為によって次世代再生産を行い、種としての不死を達成することであるが、それは個体の死を前提に、個の死を種の不死に捧げることを意味した。これに対しギッピウスの性愛思想は、生殖を死と表裏一体とみなし、生殖を介さずに死をのりこえるというユートピア思想と結びついたものである。

本論文では、動物の表象が、当初ギッピウスにとっていかに否定的なものであったかを論じる。動物はただ次世代再生産のみに奉仕する種の命の乗り物であって、個の尊厳を持たぬもの、忌避すべき性と性にまつわる事柄を体現するものであったのである。この論証を経て、本論文は、ギッピウスにとっての動物表象が徐々に両義的なものとなっていく過程を、ギッピウスの自己像、周囲が描出するギッピウス像における動物の比喩を通して追跡する。さらに、ギッピウスの詩作品の分析を行い、女性の表象と緊密に結びあう、不可知であると同時に尊く、唾棄すべき存在であると同時に畏怖すべき他者としての動物、そのイメージを抽出する。

繰り返し述べるが、動物／動物性は、西洋哲学を貫く主題であり、現代思想、現代政治哲学においてさらなる脚光を浴びるところの問題系でもある。本論文はその点にも言及している。この主題、問題系は今後の課題遂行者によるギッピウス研究のひとつの柱となるべきものである。

また、以下の学会発表を行った。

「「流動する主体」と「皮膚」　ジナイーダ・ギッピウスのフェミニズム」（日本比較文学会全国大会　2021 年）

上記論文「ジナイーダ・ギッピウスのフェミニズム　モニク・ウイティッグとの比較を中心に」と関連する発表である。

「犬と読む書物」（早稲田文芸・ジャーナリズム学会　2021 年）

なお、こうした個々の論文や発表は、研究開始以前の関連研究業績とともに、近いうちに完成される研究遂行者による単著、すなわちジナイーダ・ギッピウスの創作と思想を論じる本格的研究書の主要部分を成すものである。この著書を構成するキーワードは、

少女　／性愛／皮膚（とくに痛み）／自我／衣装／女性の絆とフェミニズム／獣　動物／書簡

となるであろう。

また著書のタイトルは『ジナイーダ・ギッピウス　皮膚の詩学』となるであろう。

最後に、以上のような貴重な研究の機会を得られたことに対し、心からの感謝の意を表したい。こうした機会を得られなければ、本研究を深化させることはできなかった。近い将来に単著をまとめ、刊行することによってわずかながらも日本のロシア文学研究、比較文学研究、人文学研究に確実に貢献し、明確なかたちをもって御恩に報いることができるよう、最大限の努力を続けるつもりである。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計4件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　3件）

１．著者名 草野慶子	４．巻 12
２．論文標題 犬と読む書物	５．発行年 2022年
３．雑誌名 早稲田現代文芸研究	６．最初と最後の頁 22-32
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 草野慶子	４．巻 58
２．論文標題 ジナイーダ・ギッピウスのフェミニズムーーモニク・ウイティッグとの比較を中心に	５．発行年 2022年
３．雑誌名 比較文学年誌	６．最初と最後の頁 1-15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 草野慶子	４．巻 8
２．論文標題 書く／愛する私と私の像―ジナイーダ・ギッピウスの『痛み』(1907)について	５．発行年 2020年
３．雑誌名 Waseda Rilas Journal	６．最初と最後の頁 65-77
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 草野慶子	４．巻 68
２．論文標題 ジナイーダ・ギッピウスの創作における〈動物性〉の問題ーー初期詩作品を中心にーー	５．発行年 2023年
３．雑誌名 早稲田大学大学院文学研究科紀要	６．最初と最後の頁 661-675
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計2件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 草野慶子
2．発表標題 流動する主体」と「皮膚」ージナイーダ・ギッピウスのフェミニズム
3．学会等名 日本比較文学会全国大会
4．発表年 2021年

1．発表者名 草野慶子
2．発表標題 犬と読む書物
3．学会等名 早稲田文芸・ジャーナリズム学会
4．発表年 2021年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

8．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関